事　例 項　目	01 障害の特性理解・実態把握　**02 個に関する指導**
概　要	**能力の凸凹により、人間関係が築けない。文系科目の授業に参加しないこと等への相談**
事　例 提供校	高校：　中部地区　全日制（私立高校） 特支：　静岡南部特別支援学校

事例の内容

高校からのリクエスト

・入試の点数は単願上位の成績でしたが、面接結果は良好とは言えませんでした。入学後、教員、同級生の名前を覚えず、一人でいることも苦痛ではないようです。特定生徒への興味が強く、早口、独特の話し方で興味のあることや得意分野を話し続ける傾向にあります。
・提出物（課題）が出せないことがほとんどで、教員の注意等も受けいれません。
・板書を写すことはなく、理数系の授業には参加しますが、文系（国語）の授業は空を見たり寝たりして過ごしています。

特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

・迷惑行為と捉えず、「本人は困っている」を前提に対応するとよいと思われます。
・「特定生徒と話をするのは１日１回とする」「話をする時間を３分と決めタイマーで示す」など本人と話し合い、同意を得ながらルール作りをしていくとよいと思います。
・「人との距離」「パーソナルスペースを数値で示す」「付きまとうと相手は嫌な気持ちになる」など、可能であればＳＳＴを取り入れていけるとよいと思います。
・分かっているようで、実は分かっていないこともあり得る。提出物（課題）を出すことは、中学校時代とは意義や意味が異なると伝える必要があるかもしれません。
・板書が苦手さを情報機器（音声入力アプリ、写真）等で補うという手段もあります。

センター的機能を活用した感想

高校　担当者のコメント

・助言を受け現在、支援中。（経過が分かったところで報告をもらう予定）

特別支援学校　担当者のコメント

・数年後、大学入試へつながるケースであるが、本校は大学入試について詳しくないので、他校の特別支援教育コーディネーターの力も借りたいと考えました。そこで、地区別の特別支援教育コーディネーター研修会で、本事例について話題提供をしました。すると、本ケースのようことに詳しい特別支援教育コーディネーターがいたので、助言をもらいました。助言内容を相談校に伝えていきたいと考えています。

まとめ

県が示す高等学校と特別支援学校の連携グループ間で始まった相談ケースです。私立校と県立校の垣根を超えた相談ということでも意味深いと考えます。特別支援学校は校種や校内人材によって、持ち合わせる情報量や力量に違い（得意分野、不得意分野）があります。ただし、特別支援学校同士の横の繋がりの強さを生かし、他の特別支援学校に情報提供を求めることができます。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。